



背景

宝永4年(1707)10月4日、日本最大級の宝永地震が発生しました。津波が紀伊半島から九州までの太平洋沿岸などを襲い、死者は2万人に達したと言われています。この中で津波の被害は土佐が最大でした。須崎では八幡神社のみこしが津波に流され、太平洋を漂流して伊豆に流れ着きました。八幡神社の木札には、宝永津波やその後の様子やみこしが伊豆に流されたことなど、また、みこしが返還された時の送り状が記されています。

アクセス 須崎八幡神社

- JR須崎駅より南西へ直線距離約1km
- 須崎市南古市町
- 緯度経度 北緯33度23分21秒, 東経133度17分10秒



宝永四年(一七〇七)一〇月四日の大地震による津波で、須崎の八幡宮は水深四メートル以上となり、社の大部分は水中に没し、倒壊しました。このため、神社のみこしが潮の流れに乗って太平洋を漂い、流れ流れて五日目の一〇月八日に伊豆の岩地に打ち上げられました。

土地の人が見つけ、遠く須崎八幡宮のものであることが分かりました。みこしは村人と神官が丁重に祭り、保管されていきました。須崎八幡宮がこのことを知ったとしても、津波による大きな痛手を受けており、数百里も離れた伊豆までみこしを受け取りに行くことは困難だったことでしょう。

安田浦の回船業の長左衛門がこれを聞き、伊豆の岩地に廻船し、みこしを須崎にお返し願いたいと申し入れました。村人と相談した神官は、おみくじにより神意をお伺いしたところ、ご帰国したいお告げが出たそうです。

そこで、長左衛門は、別れを惜しむ村人や神官の了承を得て、船に積み込み、宝永五年六月四日に伊豆を出航し、鳥羽港(三重県)に着きました。鳥羽港で志和浦の回船業の弥一兵衛の船に積み替えられて、六月一五日に須崎八幡宮宛の送り状が添えられて、みこしは須崎に向けて出航しました。

みこしが須崎八幡宮に正式に受け入れ奉納されたのは、その年の九月一日のことでした。